KELES Newsletter

関西英語教育学会報 2014年度 第2号

事務局: 〒657-8501 兵庫県神戸市灘区鶴甲1-2-1

神戸大学 国際コミュニケーションセンター 大和知史研究室内

Phone: 078-803-7684 E-mail: kelesoffice@gmail.com 学会ホームページ: http://www.keles.jp/ 2014年7月21日発行



2014 年度(第 19 回)関西英語教育学会 研究大会報告

開催日:2014年6月7日(土)・8日(日) 会場: 関西学院大学・上ヶ原キャンパス・国際学部

2014年6月7日(土)・8日(日)の2日間にわたって、関西学院大学・上ヶ原キャンパス・国際学部を会場に、第19回研究大会が開催されました。

企画ワークショップ1件, イブニング・セミナー2件, ランチョン・セミナー2件, 研究発表・事例報告8件, 講演1件と充実のプログラムに, 約120名の参会者がありました。

ご発表くださった皆様,講師をお引き受け下さった皆様をはじめ,ご参加くださった皆様,展示協賛の企業の皆様,会場校の関西学院大学の関係者の皆様に心から感謝申し上げます。

以下,企画ワークショップ,イブニング・セミナー,ランチョン・セミナー,講演の報告を記します。

企画ワークショップ

「スローラーナーの英語指導をどうするか?」 京都教育大学 泉 恵美子 先生 大阪教育大学 加賀田 哲也 先生 大阪府立高津高等学校 松下 信之 先生

泉先生の、スローラーナーの定義に始まり、英語 学習のつまずきの原因やその時期、つまずいている 学習者への対応等についての質問が参加者になげか けられた。その後、Benesse 教育開発研究センター の刺激的なデータが紹介された。中学生にとって好 きな教科としての英語の存在は、9科目中8位とは!

しかし、小学生への調査では、英語学習への好意的 な結果が示され、小中連携の重要性を感じさせるお 話を伺うことができた。また、具体的な留意点や指 導法にも楽しい活動を交えて触れていただいた。そ の後、加賀田先生による大学における事例の紹介と 共に、Humanistic Education の観点から言語教育 を捉えることの重要性についてお話ししていただい た。自己の理解や他者とのかかわり合いを大切にさ せる授業の中から英語学習につなげていく加賀田先 生の世界に誘われながら、心地よい時間を体験でき た。そして松下先生のビデオを交えながらの高校現 場での実践。参加者のペアワークも行いながら、音 読活動やダイアローグを使った学習が、松下マジッ クにかかると、気がつけば楽しんで行っている。ク ラスというコミュニティーと、生徒-先生の関係を 最大限に活用されていて、羨ましさを感じた。

3名の先生方のワークショップに参加して、「こんな先生に出会いたかった。」と思われた方が多かったと思う。ところで、中学2年生の6割以上が英語が苦手だと答えたというデータを泉先生が紹介された。半数以上が英語の授業を理解しないまま進んでいるとなると、授業を通じてスローラーナーを作っているのではないかと思ってしまう。外国語の習得は時間がかかるものであり、急ぎ過ぎてはいけない。むしろスローラーナーこそが言語習得のチャンピオン

になる可能性を備えているのではないかと思いながら、明日の<詰め込み授業>の準備をすることにする。

(報告者: 立命館大学 清水裕子)

イブニング・セミナー1 「文法から異文化間コミュニケーションまで ―基礎理論としての認知言語学概説―」

大阪大学 田村 幸誠 先生

人間が、ある事実・事象を、ことばを使って表現し、理解しようとする時、事実・事象は客観的なものであっても、人間の主観的な解釈が介在します。 田村先生は、主観的解釈こそが、異文化間の文化的差異、言語観の言語的差異を生み、人間が、同じ事実・事象を、違う角度で見ることで、文化間、言語間の差異が生まれることを、まず、お話されました。

例えば、英語の命令文では、日本人はやたら please をつけ過ぎ、ロシア人は please をつけるべきところを、つけないきらいがあり、 日本人の please の多用は丁寧さを通り越して、相手への強制 圧力を高めること、ロシア人は、依頼に please をつけないで、上から目線の命令に映ることがあります。

また、「浮かんで、入っていった」という事実に対して、日本語では「いった」という「移動」に視点の focus が、英語では「浮かんで」という「様態」に視点の focus が置かれ、日本語では「移動」は動詞で、「様態」は付加的に表現するが、英語では「様態」を floated と動詞で、「移動」は into と前置詞で付加的に表現することの、言語間の視点の置き方の違いが生まれます。

その上で、事実・事象の解釈の仕方の違いは、人間の持つ認知能力ゆえ生まれ、言語ごとに慣習化され、それぞれの文化や言語を反映した共通概念基盤になっており、こうした違いに気付かせることが、異文化や母語と異なることばの学びへの支援になることを、われわれ英語教育に携わるものたちに託し、お話の結びとされました。

(報告者: 滋賀大学 大嶋秀樹)

イブニング・セミナー2

「協働的なライティング活動をどう展開するか」 関西大学 山西 博之 先生

このセミナーでは、「ペアやグループで一つのプロダクトを collaborative に作る」という「協働的なライティング活動」について、海外では主に Storch の研究で、国内では山西先生ご自身の研究で明らかになっている点を踏まえ、どのように指導・評価を実践していくかについてお話下さいました。

協働的ライティング活動に期待される効果として、インタラクションの創発(languaging)、タスク操作による多様な指導の可能性、より正確で複雑な文章を書ける、語彙への意識高揚などが挙げられ、指導の展開については、グルーピングなどによるインタラクションの変容、タスク操作による多様な指導の可能性やシラバスの組み立て等を考慮に入れることが肝要であるとされました。

また、評価については、ペアやグループで仕上げたプロダクトの評価はもちろん、「振り返りアンケート」などを活用して作業のプロセスや意識のレベルからも考える必要があると述べられました。

学習者をよく見ることができ、知識の共構築を伴う協働的ライティング活動は、実践・研究の両面で 今後の発展が期待されるものであり、実践例や研究 成果の積み重ねによる実践者・研究者の知識の共構 築の促進にも期待する、とまとめられました。

(報告者: 神戸大学 大和知史)

ランチョン・セミナー1

「第二言語ライティング研究―目の前の現象をどう 捉えて、未来に生かすか―」

名古屋市立大学 佐々木 みゆき 先生

日本人学習者の英語ライティング行動というテーマで過去 20 年間のご自身のご研究を理論と方法の両面から振り返り、実証主義的枠組みから、社会文化的アプローチ、そして苦悩の末に Gaddis の歴史生態学的アプローチに希望を見出した現在までの過

程について触れながら、現実の英語学習者の大学四年間でのライティング能力の変化を正しくとらえるため、規則性と偶然性の双方を組み入れることで、留学や就職活動の動機づけへの影響などを説明する可能性を示されました。

その中で海外雑誌に投稿し採用されるまでの苦労 話などについても語られるなど、ランチョン・セミ ナーは初めてのご経験ということでしたが、終始な ごやかな雰囲気を醸し出しながら、真理を追究する ための方法論を模索する真摯な研究者の姿は会場の 特に若手の研究者の心に響いたことと思います。

(報告者: 神戸市外国語大学 村田純一)

ランチョン・セミナー2

「1年間の留学が学生の英語力と情意面に与える 影響―メタ言語知識の役割―」

同志社女子大学 飯田 毅 先生

海外への日本人留学者数は増加傾向にあるものの、 海外留学が大学のカリキュラムに組み込まれている 例はまだ少ない。本セミナーでは、2 年次後期から 3 年次前期まで、約 1 年間の留学が義務付けられて いる同志社女子大学の貴重な情報をご提供いただい た。

同大学では、全体のカリキュラムが留学前、留学中、留学後の3段階に分かれている。留学前の授業は、オール・イングリッシュを基本とする必修科目だけで約500時間あり、習熟度別クラス(8レベル)で、各クラス10名程度の少人数制となっている。上位成績者については、留学先(海外提携大学)の希望を優先し、授業料の差額も大学が負担するなど、学生のモチベーションを向上させる工夫をしている。留学中も、TV会議システムによる報告会などを定期的に行っており、留学後は、留学先で学んだことを卒業研究のテーマにすることを奨励している。

セミナーの後半では、同大学の留学プログラムに よって、学生の英語力と情意面がどのように変化す るかについての事例研究をご紹介いただいた。英語 力については、留学前の1年次、2年次、および留 学後の3年次のTOEIC, TOEFL iBT, Versant English Test (VET)のスコアを比較し、いずれのテストにおいても、学年が上がるにつれてスコアの伸びが見られた。スピーキング能力を測るVETの場合は、特に留学を挟んだ2年次と3年次の間でスコアが大きく伸びたが、質問紙調査では、スピーキング能力についての意見には個人差があり、留学後もスピーキングに不安を感じている学生が少なくなかった。

今後ますます増加が見込まれる大学での留学プログラムについて、示唆に富むお話を拝聴し、大変参考になった。

(報告者: 神戸学院大学 森下美和)

講演

「ダイアローグとプロフィシェンシー ーコミュニ ケーション能力の広がりと高まりをめざしてー」

講師:南山大学 鎌田修先生

指定討論者: 関西学院大学 門田 修平 先生

ご講演では、最初に、「プロフィシェンシー (proficiency)」とは、コミュニケーション能力を測 定という観点から捉えたものだと述べられ、その後 Canale and Swain (1980) などに基づくコミュニ ケーション能力の構成要素について解説された。そ して、4 人の日本語学習者の会話場面をビデオで提 示し、コミュニケーション能力を高から低に順位付 けをいかに行うかを聴衆とともに考えるタスクを実 施し, 実際に OPI (Oral Proficiency Interview) を いかに実施するかその手順(ウォームアップ→下限 探し→ (繰り返す) →上限探し→ロールプレイ→ワ インドダウン)を詳細に紹介された。鎌田先生のご 講演は、軽快なジョークを交えながらも、これまで の研究成果を踏まえた、極めて啓蒙的な内容で、会 場の多くを占める英語教師にとっても刺激的なもの であったと思われる。

指定討論者によるコメントでは, OPI では, 言語 生活遂行能力を, (1)機能・タスク遂行能力, (2)場面・ 内容処理能力, (3)正確さ生成能力, (4)談話構成能力 という極めて広範囲にわたる能力から成ることを補足しつつ、プロフィシェンシーと関連するコミュニケーション能力の一環として、「心理言語学的能力」を加えることの必要性について論じ、さらに言語が、"rule-governed"というより"highly proceduralized"

behavior であるという立場から、第二言語として の英語、日本語の潜在記憶化がどの程度進んでいる かという視点も含めて、プロフィシェンシーについ て検討することが今後重要ではないかと論じた。

(報告者: 関西学院大学・大学院 門田修平)

2014 年度(第 19 回)関西英語教育学会 総会報告

開催日:2014年6月7日(土)会場:関西学院大学・上ヶ原キャンパス・国際学部

2014年度総会では、大和知史先生(神戸大学、本学会幹事)による司会進行のもと、議長に吉田達弘 先生(兵庫教育大学)が選出され、2013年度活動報 告および決算報告、会計監査報告、2014年度活動計 画および予算案などについて報告、提案がなされ、 承認されました。

1. 2013 年度活動報告

研究大会等

◆関西英語教育学会 2013 年度 (第18回) 研究大会

日程:2013年6月8日(土)・9日(日) 場所:関西国際大学・尼崎キャンパス

内容:特別講演1件,企画ワークショップ3件, イブニング・セミナー3件,公募フォーラム1件,公募ワークショップ3件,シンポジウム1件,研究発表・事例報告16件。

◆第39回全国英語教育学会北海道研究大会

期日:2013年8月10日(土)・11日(日)

会場:北星学園大学(〒004-8631 北海道札幌市厚別区大谷地西2丁目3番1号)

主催:全国英語教育学会(地区学会:北海道英語教育学会・東北英語教育学会・関東甲信越英語教育学会・関東甲信越英語教育学会・関西

英語教育学会・中国地区英語教育学会・四国

英語教育学会·九州英語教育学会)

担当地区学会:北海道英語教育学会

関西英語教育学会担当プログラム:課題研究フォーラム(2年間継続の2年目)「英語運用能

力はいかに自動化されるか? - 基礎研究と 授業実践のインターラクション-」

セミナー・共催行事

◆関西英語教育学会 第29回セミナー

テーマ「第二言語習得研究の最前線-授業実践に どう活かすか?ー」

日程:2013年12月1日(日)

会場:龍谷大学・大阪梅田キャンパス 14 階

◆関西英語教育学会 第30回セミナー

テーマ「英語スピーキングーどう教え, パフォーマンスをどう評価するかー」

日程:2013年12月22日(日)

会場:龍谷大学・大阪梅田キャンパス 14 階

◆関西英語教育学会 第31回セミナー

テーマ「英語教育をめぐる多様な論争を超えて」

日程:2014年2月1日(土)

会場: 天理大学・杣之内キャンパス

◆第17回卒論修論研究発表セミナー

日時:2014年2月8日(土)

会場:関西国際大学・尼崎キャンパス

共催:外国語教育メディア学会関西支部、大学英

語教育学会関西支部

紀要『英語教育研究』

◇第37号刊行(紀要編集委員会)



課題研究プロジェクト

- ◇「英語運用スキルの自動化を図る理論的・実証的研究」(プロジェクト・リーダー:横川博一・神戸大学、研究期間 2011 年度~2013 年度、3 か年)
- ◇「認知言語学的知見に基づく英語学習:文法と語彙」(プロジェクト・リーダー:赤松信彦・同志社大学,研究期間:2013~2014年度,2か年)

2013 年度決算報告

月: 含メール配信)

広報,発行

2013年度の収入・支出は次の表のとおり。原案通り承認されました。

◇ニューズレター年4回発行(7月,9月,1月,3

授業研究プロジェクト

◇「小学校英語教育における発音とプロソディの指導法」(プロジェクト・リーダー:今井裕之・関西大学,研究期間:2013年度~2015年度,3か年)

2013年度関西英語教育学会決算報告

収入の部				
項目	2013 年度予算額(円)	2013 年度決算額(円)	備考	
前年度繰越金	4,510,473	4,510,473		
年会費	2,500,000	2,630,800	関西英語教育学会年会費(過年度も含む) 全国英語教育学会年会費	
参加費	300,000	381,500	関西英語教育学会第 18 回研究大会 KELES セミナー,第 17 回卒論修論研究発表セミナー	
論文集販売	10,000	13,000	学会紀要 SELT 投稿料 紀要 DVD	
その他	150,000	143,186	全国英語教育学会フォーラム補助費 展示料,論文複写サービス,その他	
合 計	7,470,473	7,678,959		

支出の部				
項目	2013 年度予算額(円)	2013 年度決算額(円)	備考	
通信費	250,000	211,074	各種郵送代(学会紀要, ニューズレター, 切手代, その他), 学会ドメイン登録費, HPメールフォーム更新費	
研究費	1,000,000	1,357,334	講師謝礼,作業補助謝礼(研究大会,KELES セミナー, 卒論修論セミナー),研究プロジェクト経費	
印刷費	1,170,000	1,153,950	SELT36/37号,第16/17回卒論修論 研究発表セミナー論文集,ニューズレター,学会封筒印刷,その他	
会議費	150,000	71,581	会議諸経費(幹事会・理事会・拡大理事会、会場代・奈 良セミナー運営補助費、その他)	
交通費	100,000	182,480	全国理事会旅費・幹事会旅費、拡大理事会旅費、その他	
事務費	50,000	71,482	文具代・コピー代・用紙代・インク代、その他	
全国年会費	640,000	600,000	2,000 円×300 名	
予備費	200,000	21,000	山岡俊比古先生お花代	
次年度繰越金	3,910,473	4,010,058	全国英語教育学会開催積立金を含む	
合 計	7,470,473	7,678,959		

2. 2014 年度活動計画

2014 年度役員体制

会 長

村田 純一 (神戸市外国語大学)

副会長

清水 裕子 (立命館大学)

顧問

沖原 勝昭 (京都ノートルダム女子大学)

織田 稔 (元関西大学)

齊藤 栄二 (京都外国語大学)

瀬川 俊一 (京都府立大学名誉教授)

宮本 英男 (元同志社大学)

幹事長(副会長兼務)

大和 知史 (神戸大学)

紀要編集委員長

赤松 信彦 (同志社大学)

幹事

大嶋 秀樹 (滋賀大学)

鳴海 智之 (神戸大学非常勤講師)

橋本 健一 (大阪教育大学)

理 事

有本 純 (関西国際大学)

泉惠美子(京都教育大学)

今井 裕之 (関西大学)

河内山真理 (関西国際大学)

佐久 正秀 (大阪信愛女学院短期大学)

里井 久輝 (龍谷大学)

高見 砂千 (大阪市教育委員会)

谷村 緑 (京都外国語大学)

玉井 健 (神戸市外国語大学)

中井 弘一 (大阪女学院大学)

中野 陽子 (関西学院大学)

真崎 克彦 (明石市立中崎小学校)

籔内 智 (京都精華大学)

山本 玲子 (大阪国際大学)

吉田 信介 (関西大学)

吉田 達弘 (兵庫教育大学)

吉田 晴世 (大阪教育大学)

紀要編集委員

田中 貴子 (同志社大学)

名部井敏代 (関西大学)

若本 夏美 (同志社女子大学)

会計監査

菅井 康佑 (近畿大学)

森下 美和 (神戸学院大学)

研究大会等

◆関西英語教育学会 2014 年度 (第19回) 研究大会

日程:2014年6月7日(土)・8日(日)

場所:関西学院大学・上ヶ原キャンパス

内容: 企画ワークショップ1件, ランチョン・セミナー2件, イブニング・セミナー2件, 講演1

件, 研究発表·事例報告8件。

参加者:約120名

◆第 40 回全国英語教育学会徳島研究大会

▶http://jasele40.shikokueigo.org/

期日:2014年8月9日(土):10日(日)

会場:徳島大学 常三島キャンパス(総合科学部)

〒770-8502 徳島市南常三島町1丁目1番地

主催:全国英語教育学会(地区学会:北海道英語

教育学会・東北英語教育学会・関東甲信越英語

教育学会・中部地区英語教育学会・関西英語教

育学会・中国地区英語教育学会・四国英語教育

学会・九州英語教育学会)

担当地区学会:四国英語教育学会

関西英語教育学会担当プログラム:授業研究フォ

ーラム (2 年間継続の 1 年目) 「小学校英語教育

における発音とプロソディの指導法」

セミナー・共催行事

※日程は変更の可能性あり。詳細は学会配布物およびホームページにてお知らせいたします。

◆関西英語教育学会 第32回セミナー

日程:2014年9月23日(火・祝)開催予定

会場:未定

◆関西英語教育学会 第33回セミナー

日程:2014年11月9日(日)開催予定

会場:未定

◆関西英語教育学会 第34回セミナー

日程:2014年12月21日(日)開催予定

会場:未定

◆第18回卒論修論研究発表セミナー

日時:2015年2月11日(水・祝)

会場:関西国際大学・尼崎キャンパス (予定)

紀要『英語教育研究』

◇第38号刊行(紀要編集委員会)

課題研究プロジェクト

◇「認知言語学的知見に基づく英語学習:文法と語彙」(プロジェクト・リーダー:赤松信彦・同志社大学、研究期間:2013年度~2014年度、2か年)

授業研究プロジェクト

◇「小学校英語教育における発音とプロソディの指導法」(プロジェクト・リーダー:今井裕之・関西大学,研究期間:2013年度~2015年度,3か年)

学会会員情報誌 KELES JOURNAL (仮称)

◇2014 年秋に創刊号を刊行予定。

広報,発行

ニューズレター年 4 回発行(7 月, 9 月, 12 月, 3 月の予定)

2014 年度予算案

2014 年度の予算案は次の表のとおり。原案通り承認されました。

2014年度関西英語教育学会予算

収入の部			
項目	2013 年度決算額(円)	2014 年度予算額(円)	備考
前年度繰越金	4,510,473	4,010,058	
年会費	2,630,800	2,600,000	全国英語教育学会年会費も含む
参加費	381,500	380,000	関西英語教育学会第 19 回研究大会・KELES セミナー・ 第 18 回卒論修論研究発表セミナー
論文集販売	13,000	20,000	学会紀要 SELT, 紀要 DVD, 卒論・修論研究発表セミナー論文集, その他
その他	143,186	150,000	寄付、利子、展示料、論文コピーサービス、その他
合 計	7,678,959	7,160,058	

支出の部			
項目	2013 年度決算額(円)	2014 年度予算額(円)	備考
通信費	211,074	250,000	各種郵送代(学会紀要、KELES ジャーナル、ニューズレター、レターパック・切手代、その他)、学会ドメイン登録費・HP・メールフォーム更新費
研究費	1,357,334	1,300,000	講師謝礼、作業補助謝礼(研究大会、KELES セミナー、 卒論修論セミナー),研究プロジェクト経費
印刷費	1,153,950	1,100,000	学会紀要・紀要抜刷, KELES ジャーナル, 第 18 回卒論 修論研究発表セミナー論文集, ニューズレター, 学会封 筒印刷, 振込用紙, その他
会議費	71,581	100,000	会議諸経費(幹事会・理事会・会場代・その他)
交通費	182,480	200,000	全国理事会旅費・幹事会旅費、その他
事務費	71,482	50,000	文具代・名札代・コピー代・用紙代・インク代、その他
全国年会費	600,000	640,000	2,000 円×320 名
予備費	21,000	50,000	
次年度繰越金	4,010,058	3,470,058	全国英語教育学会開催積立金を含む
合 計	7,678,959	7,160,058	

第17回卒論・修論研究発表セミナー報告・発表体験記

開催日:2014年2月8日(土) 会場:関西国際大学 尼崎キャンパス

(少し報告が遅くなってしまいましたが,第 17 回 卒論・修論研究発表セミナーの報告・発表体験記を 以下に記します。なお,体験記の発表者所属は,発 表時のものです。)

第 17 回卒論・修論研究発表セミナーが,大学英語教育学会関西支部と外国語教育メディア学会関西支部の共催にて,2014 年 2 月 8 日(土)に関西国際大学尼崎キャンパスにおいて開催されました。

心配された雪は未明までに雨に変わったものの、 非常に足元の悪い中、果たしてどのくらいの人が集 まってくださるのか。そんな心配をよそに、朝早く から多くの方にご来場いただき、午前の発表から活 発な議論が展開されていました。残念ながら3名の 方が、交通機関のストップなどの影響で発表キャン セルとなりましたが、当日行われた 研究発表は合 計39件(口頭発表32件・ポスター発表7件)。内 容も年々多岐にわたっていっており、関西の英語教 育研究の幅の広さや活発さを、このセミナーが最も 良く表しているのでは、と感じるほどです。ポスタ 一発表会場にも多くの方が足を運んでくださり、口 頭発表とはひと味違う、より密な議論が行われてい た様子も、企画した側としてはうれしい光景でした。

また、スペシャル・トークとして、首都大学東京 の萩原裕子先生をお招きし「言語習得の脳科学」と いうタイトルで講演をしていただきました(概要に ついては下記参照)。

悪天候に加えて、年々忙しさが増すばかりの2月 上旬という時期にもかかわらず、今年も130名の参加者が集まる盛会となりました。授業やゼミの1年の締めくくりの場として、卒業生・同窓生との再会の場として、そして新たに切磋琢磨していく仲間を見つける場として、各参加者が思い思いに実りある1日を過ごしてくださっている様子を見ることができたことが、実行委員として大きな喜びでした。

なお、卒業論文・修士論文の研究発表の発表者と

タイトルの一覧は、関西英語教育学会ウェブサイト (http://www.keles.jp/program/keles_gmt17_program/)にてご確認ください。

<スペシャル・トーク>

卒修論セミナーの一大イベント,スペシャル・トーク,今年度は,我が国の言語脳科学の研究の第一人者で,Brain and Language, Journal of Cognitive Neuroscience を始めとする数々の著名な国際誌の論文,そして,『脳にいどむ言語学』(1998)の著者として,つとに高名な,首都大学東京大学院人文科学研究科教授萩原裕子先生をお迎えしてのご講演です。

萩原先生は、脳波による脳活動の計測を行うERP (事象関連電位: 時間解像度に優れた脳活動計測の手法)、光トポグラフィや fMRI による脳機能イメージング (空間解像度に優れた脳活動計測の手法)の2つを駆使されて、生成文法を基盤に、母語、第二言語、外国語の習得と脳の発達、言語、及び言語処理の生得的な言語機能の脳内基盤の解明に取り組まれ、我が国はもとより、世界の言語脳科学の研究を常にリードしてこられてきました。今回のスペシャル・トークでも、そうした萩原先生の言語に対するご研究から生まれた数々の成果と知見がご披露されました。

ご演題は、「言語習得の脳科学」というもので、 最新の言語脳科学の研究の成果をご紹介されながら、 ご自身の脳活動の計測を通して得られた知見をもと に、実証的に、人間の脳と言語、言語習得の関係に ついて、とりわけ、我々日本人が外国語を学ぶとい うことについて、脳の「構造」と「機能」の変化の 長期にわたる継続と脳の持つ「可塑性」という視点 からお話を頂戴いたしました。

まず、思春期の脳の構造的変化の研究事例を示され、脳の成長のスピードは場所によって異なり、大脳の、神経細胞が多く集まった脳の表層部の灰白質では、体積密度が10~30歳にかけてゆるやかに上昇し、灰白質の内側の神経線維が多く集まる白質では、

10~25歳くらいにまで成長が著しく、神経線維が増 加することをご紹介されました。そのうえで、第二 言語,外国語を学ぶことと習得時期について,18歳 まで第二言語を学んだ経験がない学習者が、外国語 の通訳者を目指して、第二言語を集中的に学ぶこと によって生じる、脳の構造的変化のお話をされ、強 い動機付けを持ち、しっかりした学ぶ意思がある学 習者は,左脳前頭中・下回 (BA46) ,左脳上側頭 のウェルニッケ野の一部の、それぞれ、脳の言語関 連領域で大きな変化が、また、左脳の海馬の体積の 著しい変化が、第二言語の習熟度と相関して見られ ること、さらに、第二言語の習熟度の伸びに伴う脳 の構造的変化については、習熟度が高くなると、白 質の神経線維の体積が増加することをお話されまし た。また、第二言語、外国語を学ぶことにより、脳 の神経線維の連結にも大きな変化が見られ、変化は、 左脳の前頭・側頭の古典的言語野(ウェルニッケ野, ブローカ野) 周辺にとどまらず、脳の前後左右をつ なぐ神経線維(連合線維・交連線維)が太く変化し、 右脳頭頂葉の連結線維にも大きな変化がみられるこ とを示されました。そして、言語や言語習得には、 脳の様々な場所が関わっており、第二言語、外国語 を学ぶことによって、学習開始時期が遅い学習者の 場合にも著しい脳の変化が見られること、脳の左 右・前後の領域の構造上の変化が、部位による違い はあるものの、30歳くらいまで続くこと、また、左 脳の言語関連領域の変化も遅い時期まで続くことを お話され、脳は、第二言語、外国語を学ぶことによ り、18歳以降も変化する可塑性を持つことをお話さ れました。

次に、日本人の小学生、大学生の英語の習得についてご紹介され、小学生の脳活動を調べると、英語の習熟度が高くなると、母語と同様の脳波の反応(N400→late positive component/P600)が出現し、脳の中では、母語も外国語も同じような処理が行われていること、さらに、小学生の英語の習熟度と脳活動の関係を調べた場合には、英語との接触開始(0~7歳の期間で)が遅いほど習熟度が高いこと、そ

して、習熟度の高さは、接触開始年齢よりも、接触時間の効果が大きいこと、また、日英語の単語の、知っている語と知らない語の復唱では、それぞれの脳活動に違いがあること、そして、大学生の外国語の習得では、脳の可塑性が年齢的に遅い時期まで継続することを裏付ける、脳の構造的変化が見られること、文法処理については母語も外国語も同じような脳の活性が見られ、脳活動は、学習開始時期、習熟度により影響をうけることを示されました。

最後に、思春期の脳の言語関連領域の活性の変化 を例に、人間の思考は、人間の持つ言葉の能力を基 盤として作られていることをお話され、われわれ英 語教育にたずさわるものたちへ、ことばの力を育む ことへの熱い思いを込められてご講演を結ばれまし た。

今回のスペシャル・トークでの萩原先生のお話は、 最新の言語脳科学のご研究の成果と知見を基盤に、 英語教育の実践と研究を通じて、ことばの力を育む ことで、次世代の若者を育てるということを、門出 を迎えた卒業生・修了生に託してくださった、萩原 先生からの、暖かくも力強い、若き英語教育の担い 手たちへのメッセージとなりました。

(報告者: 滋賀大学 大嶋秀樹)

<発表者体験記>

【卒論】

樋口 拓弥さん (関西大学)

昨年度、「来年はここで発表をしよう」と思い参加 した第 16 回卒論・修論研究発表セミナーから 1 年 がたち、今回は発表者として参加させていただきま した。発表時間帯が最後だったこともあり、そこま でに他の参加者の方の発表をたくさん聞くことがで きましたが、自分と同じように大学を卒業しようと している学生の調査や分析のレベルの高さに驚かさ れました。

私はこれからより発展していくと考えている、タ ブレット端末を教育に応用するためのアプリについ て発表させていただきました。自身で開発した iPad/iPhone 用のアプリ "Yubiquitous Text" は、現在より多くの人からフィードバックをもらい改善を行っており、今回の発表はここまでの振り返り総括とより広いフィードバックをもらうためにはうってつけのチャンスでした。当日出会った人たちがこれから教育現場に出て、私の開発した"Yubiquitous Text"なども使いながらより良い教育環境が築かれていけばと思います。

最後になりましたが、当日コメント・フィードバックをいただいた先生方・学生の皆様、また "Yubiquitous Text"をダウンロードいただいた皆様、ありがとうございました。

"Yubiquitous Text"の公式ウェブサイト https://sites.google.com/site/yubiquitoustextja/home

【修論】

金澤 佑さん (関西学院大学大学院)

この度、修士論文の内容を発表する機会を頂きました。本セミナーの特徴を私なりに単語で表すなら、一つ目は「encouragement」です。大勢の方々が雪の中朝早くから会場に足を運んでおられ、私の拙い英語での発表を真剣に聞き、貴重なコメントを多数くださいました。会場を漂う凛としつつもサポーティブな雰囲気は今思い出しても居心地よく、関心をもって真摯に聞き、質問し、議論してくださった皆様の眼差しは、今なお脳裏に残っています。コメンテータを務めてくださった鬼田崇作先生をはじめ、参加してくださった皆様に、心より感謝申し上げます。

二つ目は、「variety」です。多岐にわたる発表を聞いて新しい分野への興味関心のきっかけができただけでなく、多様な参加者との交流を通じて研究・教育実践双方についての新しい見識が得られました。このKELESという素晴らしい学問の場に巡り合えたことを嬉しく思います。ここで得た知見や励ましを胸に、引き続き博士課程で研究を続ける所存です。

【ポスター】

南 侑樹さん (京都教育大学大学院)

正直な話,自分の修士論文をポスターにするのは 紙幅の都合上,大変に苦慮するところがありました。 しかしながら,この作業は自分が本当に伝えたいこ とを洗練させるために極めて有意義なことでもあり ました。

ポスター発表は卒業論文の際も行いました。2回 の経験を通して感じたことですが、ポスター発表は 随時聞き手の方々と対話を交わしながら発表を進め られるというところが非常に魅力的です。結果、密 な議論が可能になります。発表時間は1時間でしたが、あっという間に終わってしまう程に充実した時間で、そのやり取りの中で今後の研究につながる気づきも数多くありました。ご助言いただいた方々にこの場を借りて御礼を申し上げます。

また、ポスター発表は口頭発表と比べると和やかなムードで進めることができ、リラックスした状態で自分の研究の要旨をお話することができました。これから執筆される学部生、院生の方々には是非ポスター発表という選択肢も検討していただきたいと思います。

学会事務局からのお知らせ

◆関西英語教育学会 学会誌 『英語教育研究』 (SELT) 第38号 投稿論文募集のお知らせ

関西英語教育学会(KELES)では、学会誌『英語教育研究』(SELT) 第38号(2015年3月刊行予定)への論文投稿を下記の通り募集しております。

2014年度に開催された第19回関西英語教育学会研究大会および全国英語教育学会第40回徳島研究大会での発表論文が優先されますが、これらの発表を経ない論文についても、一定の枠内で審査対象となります。会員の皆様の多数のご投稿をお待ちしております。

投稿受付期限

<u>2014年8月31日(日)22:00(午後10時,厳守)</u>

投稿にあたって

学会ホームページ(http://www.keles.jp/activity/selt/)の投稿要領を熟読し、テンプレート(英語・日本語)をダウンロードし、テンプレートに書かれている諸注意も熟読の上、テンプレートを用いて原稿を作成し、学会ホームページ http://www.keles.jp/activity/selt/の投稿フォームから投稿してください。

発行規定および投稿要領改正の主な改正点

以下の点が、第 35 号より改められていますので ご注意下さい。

(1) 掲載論文が、「投稿論文」と「研究ノート」の2 種類になりました。

投稿論文は、英語教育および広く言語教育に関する理論的・実証的研究論文とし、英語授業実践に関する報告は、研究ノートとします。

(2) 論文の分量が変更されました。

論文分量は 10 ページ以上 20 ページ以内, 研究ノートは 10 ページ以内とし, いずれもページ 数に参考文献, 図表, 註, 資料を含めます。

投稿先および学会誌に関するお問合せ先

- (1) 投稿先: 学会ホームページhttp://www.keles.jp/activity/selt/ の投稿フォームから投稿してください。
- (2) 投稿した日から 2 日以上経っても、受領確認の メールが届かない場合は、お問い合わせフォー ムにて問い合わせて下さい。

◆第40回全国英語教育学会徳島研究大会

http://jasele40.shikokueigo.org/

標記研究大会が、2014年8月9日(土)・10日(日) に、徳島大学・常三島キャンパスにおいて開催され ます。詳細は、上記サイトをご覧下さい。

◆訃報

本学会に多大な貢献をされた宮本英男先生(享年86歳)が、平成26年7月18日(金)にご逝去されました。宮本先生は、日本英語教育学会関西支部(現在の関西英語教育学会)の支部長を長らく務められ、その後、関西英語教育学会では顧問というお立場で、また、全国英語教育学会の創立にもご尽力いただきました。ここに慎んで哀悼の意を表し、ご冥福を心よりお祈り申し上げます。

◆各種お問い合わせフォームについて

http://www.keles.jp/

お問い合わせには、学会ホームページの各種お問い 合わせフォームをご利用下さい。

- ▶入会をご希望の方
- ▶研究大会 研究大会の発表応募,企業展示の申込みなど
- ▶各種セミナー セミナーへの参加登録,発表申込み,企業展示の 申込みなど
- ▶学会誌『英語教育研究』 学会誌への論文投稿など
- ▶お問い合わせ 学会費、学会誌、研究大会、各種セミナー、入・ 退会、会員情報の変更、その他学会全般に関する お問い合わせ

